

## 第2回双葉町復興まちづくり委員会 議事録

■日 時 : 平成24年 8月28日(火) 午後2時30分～午後4時45分

■場 所 : 双葉町役場埼玉支所 3階 LL 教室

■出席者 : 双葉町復興まちづくり委員会委員

事務局(双葉町企画課、(株)エコエナジーラボ)

(参照: 第2回双葉町復興まちづくり委員会座席表)

### <概 要>

#### 1. 開 会

【三井所清典委員長】

それでは、第2回双葉町復興まちづくり委員会を開催させていただきます。復興庁、福島県ご出席ありがとうございます。委員の皆様よろしくお願いします。

#### 2. 議 事

【三井所清典委員長】

それでは、早速ではございますけども最初の議題に入りたいと思います。

##### (1) 会議の公開等について

【三井所清典委員長】

まずは、資料2になります。会議の公開等についてでございます。会議の公開につきましては、この会議を広く双葉の町民に知らせていく、あるいは関係者に知られるようなことが望ましいという考え方、あるいは前回の委員会で公開して報道されることによっても多くの方に知ってもらえるのではないかとのご意見もございました。そういうことを思って、前回は最初の部分だけを公開ということで配慮して進めさせてもらっていたんですけども、やはり、これは公開で全部進めた方がいいんじゃないかと思ひまして、公開についての提案をしたいと思っております。資料2を見ていただきますと、(1) 会議は、公開とする。(2) 会議資料は、原則として公開する。原則としてというのは、この資料はやはり公に回らない方がいい、委員会限り望ましいような場合には、それは公開しない。でも、原則として資料は公開するという、原則という部分が入ると思います。3番目に、会議後、事務局において意見の概要を整理した議事概要を作成し、ホームページに掲載する。第1回目から公開したいということになります。4番目に議事録については、発言者に確認の上、発言者を伏せてホームページに掲載する、これも第1回目に遡って実施したい、ということでございますが、1つ1つ皆様のご確認を得たいと思います。まずは、会議を公開とする、ということはいかがでしょうか。

[異議なしと呼ぶ委員あり]

【三井所清典委員長】

異議ございませんか。異議なしという声をいただきました。どうもありがとうございました。2番目の会議資料は、原則として公開とする、ということはいかがでしょうか。異議ございます

か。

【菅野博紀委員】

全部出したらいいいんじゃないんですか。コソコソしてるんじゃないんですから。原則なんて言わないで、ちゃんと全部出したらいいいんじゃないんですか。

【三井所清典委員長】

出せる物はみんな出すということが基本ですから、余程の場合、誰かがこれは止めてほしいとおっしゃるようなことがあったら、ということで原則が入っています。そういう意味で原則なんですけど、原則を今入れなくてもいいんじゃないかというご意見がありましたが、原則を入れることでよろしゅうございますか。

〔異議なしと呼ぶ委員あり〕

【三井所清典委員長】

どうもありがとうございました。3 番目、会議後、事務局において意見の概要を整理した議事概要を作成し、ホームページに掲載する、第 1 回目に遡って実施したい、とのことでございますが、いかがでしょうか。

〔異議なしと呼ぶ委員あり〕

【三井所清典委員長】

どうもありがとうございました。異議なしということでございます。お認めいただいたと確認します。4 番目、議事録については、発言者に確認の上、発言者を伏せてホームページに掲載する。この発言者に確認の上というのがございますので、それは確認していただいて、公開ということですがいかがでしょうか。

〔異議なしと呼ぶ委員あり〕

【木村真三委員】

なぜ、発言者を入れないんですか。僕自身が考えるのは、それはきちんと話をするときに責任を持った発言をしないといけないわけです、こういう会議では。貴重な時間を割いて私共は来ていますから、それだったら私自身は、きちんと発言者の名前を残してやるべきではないのかと考えておりますが、いかがでしょうか。

【菅野博紀委員】

異議なし。

【三井所清典委員長】

その発言は私も理解はいたしますが、発言を自分の名前を入れてほしくないっていう方がおいでになった場合の話ですから、今のご意見は積極的に私も賛成はしたいと思っはいるんですけども、よろしゅうございますか。名前を確認の上ということで、名前を表に出しながら発言する、公開するという修正の意見がございましたけど。

【菅野博紀委員】

いいと思います。

【三井所清典委員長】

よろしいですか。

〔確かにそうだと呼ぶ委員あり〕

【清水修二委員】

伏せてくれという人は、伏せていいでしょうということですね。

【木村真三委員】

かえって伏せるというのは、なぜ伏せなければならないのかというのが、私は不思議だということですね。

【三井所清典委員長】

それは、色々性格の問題もあるんだと思うんですね。

【木村真三委員】

そうじゃなくて、私も国会の参考人質疑に出る時には、全部テレビ公開されるわけですよ。そのテレビ公開の中で、誰が何を言ったかというのは残されるわけですよ、議事録として。僕は、これは準じるものであると思っています。これは神聖なる会議の上でやることでありますから、それを逆に伏せて、好きなことを言って、責任を持たないっていうのは、それはおかしいんじゃないんでしょうか。

【三井所清典委員長】

責任を持たない発言をするわけではないとは思っておりますけど、会議に慣れていないとか、人前で意見を出しにくいという方がおいでになった場合には、と思つての配慮でございますけれども、いかがなさいますか。

【岩本久人委員】

これから双葉町をどうするかという話で皆さん集まっているわけですから、別に腫れ物を触るような意見で、それを隠すとか、もし、それが自分が言い過ぎたところがあればそれは自分の意志で削除してください、と言えればいいわけですから。「只今の意見は削除をお願いします」と議事録から消してもらえればいいわけですから、別にこれでいいと思います。

【三井所清典委員長】

今、岩本委員から補足がございました。そういう理解の上で、名前をホームページに出すということで、よろしゅうございますか。

[異議なしと呼ぶ委員あり]

【三井所清典委員長】

どうもありがとうございました。それでは、会議の公開についてというのは、全項目について皆様からご承認を得ました。会議は公開で進めたいと思います。ありがとうございました。

それでは、この復興会議の第1回目、第2回目の会議の性格について、少し、議事報告に入る前にご説明しておきたいと思ひますけれども、今日の会議は、やはり町民の皆様から町の将来の姿や自分の生活についてのご意見を、7000人の復興会議となっておりますように、どうやったら限りなく全員から、そして、意見が変わったりするような場合にも、変わった意見を常に聴き取ることができるようにするにはどうしたらいいかということを考えて、町民の皆さんの会議の持ち方について、意見の集め方についてのご意見をお伺いするということで、今日の会議を持っていきたいと思ひます。色々な町民の意見がかなり出てきたところで、その意見についてのそれぞれの皆さんの考えとか、ご意見をまたいただくということになる。まちづくり

計画についての方向へ向けての会議、話になると思います。しばらくはそういうことで、町民の意見をどうやったらお聴きすることができるかということについてのご意見をいただきたいと思っております。そういうことで、まずは、福島会議の報告として意見をいただいた話をお聴きしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

(2) 「7000 人の復興会議」福島市会議の結果について

【説明者 事務局 (株) エコエナジーラボ代表取締役 善養寺】

(資料 3 : 双葉町 町民参加の『7000 人の復興会議』福島市会議 報告)

「7000 人の復興会議」サポート本部より、8 月 19 日に行われました福島市会議の報告をさせていただきます。8 月 19 日の日曜日に、13 時から 17 時にかけて、福島県青少年会館 2 階の大研修室において、第 1 回目の 7000 人の復興会議を開催させていただきました。参加人数は 70 名で、双葉町町民が 68 名、町民以外の関係者が 2 名、双葉町町民のうちの 8 名の大学院生等の方に、端末の入力等会議運営のお手伝いをしていただきました。今、配付しました資料といたしまして 7000 人の復興会議説明資料と、双葉町みんなでまちづくりマイノートを配りました。グループ単位、5 人から 6 人の小グループになっていただいて、ゆっくり時間をかけて個人個人の意見を出し合ってもらう形のワークショップになっております。9 グループできまして、資料 3 の中に書かれていますが、その中でグループそれぞれのグループ名を付けていただいて、グループごとに意見を出し合ってもらって端末に入力し、みんなに公開するという形になります。意見総数としては、色々な提案も含めて 257 意見。当日は、報道関係者 12 名が参加されておりました。開催のプログラムの次第につきましては、開会の挨拶、今回、三井所先生が委員長としてご挨拶をいただき、その後、7000 人の復興会議の趣旨説明を私どもでさせていただき、そしてワークショップをいたしました。まず、ウォーミングアップという形で、双葉町を考えるというところで、改めて双葉町の良かったところを、一人ひとりに思いや考えを振り返ってもらおうということをやりました。その後、その他どんな意見でもいいのでということで、グループごとに話し合っ

て提案をしていただきました。それで最後に、振り返りとして、皆で班ごとにこのような多様な意見、意見を統一するということはしておりませんので、いろんな 6 人の中から出てきた意見を発表して、振り返りをいたしました。最後に、今後の進め方について説明をして閉会といたしました。会議の会場の雰囲気ですが、この間ここでも説明させていただきました、この会議の位置付けを説明した後、見ていただくように、それぞれの 6 人グループで、小さなグループになることで、70 人集まっても 1 時間半で 70 人それぞれから順番に意見を聴いていくと、一人があまり発言をできる機会がなかったりするので、小さなグループ単位で 1 時間半じっくり、その個人個人の考え方や、自分が今困っていることなどを出し合って話し合ってもらおうと。そして、当然、高齢者の方が多いので、こういう電気端末を入力することが難しいので、そこを大学生の若い人たちがお手伝いをして、そこで出てきた意見を順次この端末で入力をする。入力することによって、ここにありますモニターに、全班が意見を出しているものがみんなで情報共有をしながら、自分たちのまた意見を話し合っていくということをとっています。この端末に出ています集められた意見は、この会議に参加していない町民の方にも、瞬時にそれを見ることができるようになっております。じっくり話し合っ

も出ましたが、じっくり出すことができ、この会議としては大変好評でした。先ほどお配りしましたマイノートと、このポストイットを使いまして、ここに自分の意見をそれぞれ書いてもらったものを、これは「双葉町いいね」ですが、「仕事」についてとかカテゴリー「その他」とかいろいろなものについて出してもらって、これについて入力をしていくという形になっております。ですので、このマイノートに、本当はこの付箋を貼って帰ってもらって、自分の意見がこの後、まだシステムとしてはとりあえず暫定版なので、9月の中旬から、これに出された意見に対して、他の地域からの町民の方々から賛同があったり共感するものがあったりすると、これに投票できるようになっていますので、そこでアンケートのように数が集計されていきます。これから、全町民の方にこのマイノートを郵送する予定でいまして、この会議が行われる前に、自分の意見をそのノートに本当は書き溜めて来てもらって、それをこの会議の会場でみんなで意見交換をしながらまとめたもの、自分の意見を整理したものを、ここでアップすることで、また、そこで共感する人たちに票を入れてもらうという形で進めていきたいと思います。こういうデジタルが高齢者には難しいと言われたんですが、こうやって情報を全部集約することで、先ほどお配りしていますこのエクセルシートで集計されているものがあると思うんですが、この会議のすぐ後に、それを集計して、今の一覧表にすることができるような仕組みになっております。ですので、いろんなところからどんどん意見が挙がってきたら、外の、会議に参加していない人たちの意見も含めて集計ができるような仕組みになっています。第1回目としては、こんなことにインターネット使えないんじゃないかとか、何か変わった会議形式で不安もあったようですが、終わった後では、大変いい会議だったので、今後、またしっかり続けていってほしいということと、また、次の会議にも参加したいという人たちも出てきましたので、会議としてはいい形で終わったと思っております。以上が、福島会議の報告です。よろしくお願いします。

### 【三井所清典委員長】

福島会議に参加いただいた委員の方もおいでになって、そういう方は会議の様子、皆さんの話し合いの様子、小グループなものですから、皆さんが十分にご発言なさっている様子など体験されて、最初の印象とか、ITを使うところを見て、ちょっと緊張された方もおいでになりましたけれども、会議の後では、皆さん十分に話をし、紙に書いたものを貼ったものですから、よく理解して会議が終えられたと思っております。引き続いて、双葉町復興まちづくり計画の検討体制と委員会の進め方の案について、事務局から説明をいただきたいと思います。

### (3) 今後の検討の進め方について

【説明者：事務局 企画課長 駒田 義誌】

(資料4：双葉町復興まちづくり計画の検討体制

資料5：双葉町復興まちづくり委員会の進め方について(案))

お手元の資料4、資料5をお出しいただければと思います。今、ご説明した町民の意見を聴く場である7000人の復興会議と本日のこの復興まちづくり委員会について、なかなかそれらの関係がよく分かりづらいという話は、19日の日曜日の復興会議の場でもございました。今一度、両者の関係について、整理をさせていただきましたので、それをまず、ご説明させていただきたい

と思います。まず、双葉町の復興まちづくり計画でありますけれども、あくまでも町民の意見を吸い上げて計画を作っていかなければなりません。その意味では、この右側の、本日お集まりいただいた委員の皆様が参画されている復興まちづくり委員会というものが、公の、皆さんそれぞれ代表の立場で入っていらっしゃると思いますので、その立場で、まさにこの計画案、任務というところに書かせていただいておりますけれども、7000人の復興会議の町民の意見を踏まえて、町の復旧、復興のあるべき姿の基本方針であるとか、仮の町を含めた復興計画の施策事業であるとか、その他復興計画の策定に関する事項について、この委員会の中でご議論いただいて、それを計画案という形でまとめて、町長の方に意見具申をするのが、このまちづくり委員会の役割でございます。このまちづくり委員会45名で構成されております。その意味では、よりテーマごとの突っ込んだ議論というものも、今後必要になってこようかと思います。それについては、前回もご意見がありましたけれども、部会というのを作りたいと思っております。部会については、一度9月末で復興会議の中間的な整理、町民の意見がどういうものがあるかというのを整理させていただきますので、それを見てくると、概ねどういうところが関心が強いテーマなのかということが見えてきますので、このテーマに応じて部会を10月以降立ち上げていくという形を今、念頭に置いてございます。ここが計画を作っていく訳ですが、計画を作るにあたって、やはり、町民の皆さんがどういうことをお考えになられているのかということ、また、町民の皆さんからいろいろなご提案があるかと思えます。その町民一人ひとりの意見、提案を聴く場というのが、左側にある7000人の復興会議という場になります。その意味では、町民の皆さんはこの7000人の復興会議にご参加いただく、また、委員会の方も先ほど公開が認められましたので、傍聴していただいたりであるとか、ホームページを見ていただいたりであるとかで、委員会の状況も見てください。そういう会議の仕方を念頭に置いております。この左側の7000人の復興会議につきましては、これは役職、職種というものを関係なく、皆さん一人ひとりが同じ立場で、町の将来について、意見をお互いに出し合っていただく場という形です。そういう意味では、一人ひとりの意見、提案を丁寧に吸い上げる場として、この7000人の復興会議は位置付けております。そうした観点からも、先ほど説明があったように、対面の対話集会のような形式ではなくて、5,6人のグループになって、それぞれグループの場で町民同士が意見を出し合ってもらう、そういう形で一人ひとりの意見を丁寧に吸い上げる形をとる、ということを会議形式では念頭に置いております。その意味では、この目的等というところに書いてはありますが、あくまでもこれは、復興まちづくり委員会で復興計画を作っていくための基盤情報、基礎情報として町民の方々がどういう意見を持っているのかというのは、今回第1回の分だけでもこれだけの意見が整理されております。これをこれから積み重ねて整理をしていき、これをこれから計画の方に反映していくという形をとります。その意味では、町民でこの委員会におられる委員の方々というのも、一町民の立場で復興会議、ワークショップにご参加いただくという形になります。7000人の復興会議は、今しがた申し上げたワークショップ、まさに対面形式で5,6人がグループになって意見を出し合う場というワークショップ会議がメインになります。ただ、どうしても会議には来られない方、会議の日程は決まっておりますので、どうしてもご都合の悪い方がいらっしゃいます。また、特に、若者であればやはりインターネットというのは使える方も多くいらっしゃいます。そういう意味では、そういった若者の方々にも自由に意見を言える場を提供するという意味で、

このインターネット会議というのも、同時並行で動かして意見を吸い上げていく。また、本日説明させていただきました「まちづくりノート」というものを町民の皆さんにお配りして、それぞれまちづくり、町の将来についてのご意見、ご提案を書いていただきます。そういったものも、整理をして集約していくということ。その意味では、対面の会議、またデジタルを使ったインターネット、またアナログの紙を使ったもの、そういった複数の媒体を駆使して、できる限り多くの町民の方々の意見、提案を吸い上げていくという形をしていきます。特に、ワークショップ会議につきましては、下の方に枠で囲っておりますけれども、本日、チラシでお配りしておりますように、復興会議という今日、ご説明したような会議形式が、全部で8回でございます。ところが、何もそれで終わるわけではございません。それぞれ仮設単位や団体単位などでも、いろいろとまちづくりについて議論したいというお話もあろうかと思えます。そういったものについても、丁寧に地域単位で事務局を作って、ワーキンググループという形で、この復興会議のワークショップもより細かい、丁寧な形でこれからやっていくということも含めて、やっていきたいと思っておりますので、そういった重層的にワークショップをやることで、できる限り多くの方々の意見を吸い上げて、この委員会に出していこうと思っております。その全体の体系を時系列で整理したものが、資料5という縦紙の紙になります。これは、あくまでも委員会で今後また議論しながらスケジュールというのは決まっていくべきものだとは思っておりますけれども、今、復興会議のスケジュールがある程度決まっておりますので、それとの照らし合わせの中でこういった形の進め方になるか、この点については、委員の中からも委員会の大まかなスケジュール、今後の皆さんのご予定もあるとのご意見もありましたので、ちょっと全体のスケジュールを案として整理をさせていただきました。今回は、今、第2回ということで8月28日でございますけれども、これから9月2日、16日、23日と「復興会議」というワークショップ会議がございます。併せてこの9月からは、ホームページの意見投稿も順次スタートしてまいりますし、先ほど言った仮設単位であるとか、団体単位、そういった細かい単位でもワークショップをやっていくことを支える地域事務局というスタッフも9月中旬以降始動していきます。そういったことをやっていますが、とりあえず8月19日、9月2日、9月16日、9月23日の4回の復興会議で出された意見を今一度整理をした上で、一度、第3回の委員会でご報告をさせていただく。そうすると、大体、この4回の会議の中の町民の意見を踏まえて、具体的なテーマ設定を委員会の方でして、それに応じて部会を設置して、当面は、部会で細かい議論を深めていただいて、さらに並行して、いわき、郡山、つくばでも会議をやっておりますので、12月中旬に一度、これらの議論の整理であるとか、部会の検討状況、また、7000人の復興会議での課題整理の方向性等について、年内に一度議論をいただいた上で、年明けには復興会議のまとめである「まちづくりノート」を回収することによって、ノートに書かれた意見、また、インターネット、ホームページに出された意見、こういった3媒体の意見をまとめて、年内に一度整理をさせていただいたものを、1月のこの委員会で意見集約の結果ということでご報告させていただいて、その上で具体的な計画の構成案をどうしていくのかということを議論していく。特に計画については、それぞれテーマごとに深掘した議論が必要だと思いますので、その辺りについては、部会の方でも十分に議論をしていくということを重ねた上で、3月に一度全体の案を示し、できれば3月下旬に計画案をまとめていくということ、年度内に計画策定を見据えると、そういった形のスケジュールを一応案と

して、今整理をさせていただきました。説明は以上です。

【三井所清典委員長】

はい、どうもありがとうございました。

(4) その他

【三井所清典委員長】

それでは、町民からの意見をどのようにしていったら、より多くの意見を聴取できるか、聴き取ることができるかということについてのご意見をいただきたいと思います。

【岩本久人委員】

私も福島市の 7000 人の復興会議に参加させていただいたんですが、福島とか郡山とかいわきとか、これから順次 7000 人の復興会議をやると思うんですけど、そこに避難している方が一堂に会して、そういう会議を持たれるのは良いことかなと思うんですけども、皆さん戸惑っていたのは、何について話し合ったらいいのかなという、目的というか、前にも話したかと思うんですけども、復興に対する町の基本的な理念が無いんですよ。だから、短期的に何やるのか、中期的に何やるのか、長期的にどういったことを考えなくちゃいけないのかという、そういう理念の下で、やはり話を合わせないと、焦点がぼけていて、話し合いが定まらないというように思うんです。10 のカテゴリーで話し合いは出たんですけど、私は 10 個の意見出せなかったです。双葉町の良い所ばかり書いて、あとのことは書けなかったです。ですから、なかなか選択肢が多くて、皆さんあの短い時間で、十分な意見を出し尽くせなかったのかなと思うんです。実際、70 人です。福島には 450 から 460 人いると思うんですけど、参加者が 70 人ですよ。これから何カ所やるかわからないですけども、どのくらいの延べ人数になるんでしょうか。課長からは、その他にも仮設、小さいワークショップも計画しているというようなことですけれども、延べどのくらいの、7000 人の復興会議の中でどのくらいの意見の集約ができるのか。それこそ、町でやった 17% のアンケートに満たないような状態になったのでは、これでは多くの町民の皆さんの意見を反映した復興計画にならないと思うんです。だから、前の会議でも意見を述べた方いますけど、裾野を広く意見を集めるには、アンケートというのも大事じゃないかと思うんですよ。10 代には 10 代のアンケート用紙、20 代には 20 代向けの簡単なアンケートを作成して、皆さんから意見をいただく。そして、7000 人の復興会議とアンケートを踏まえて、我々まちづくり委員会がそれをたたき台に、短期的なビジョン、中期的なビジョン、長期的なビジョンを立ち上げるのが、このまちづくり委員会ではないかというように思うんです。ですから、この 7000 人の復興会議、本当に実のある話し合いになるのかどうか、もう少し考えてもらって、我々も皆、知恵を出して、もう少し実りあるものにすべきだが、皆戸惑ってるようなところがあるので、このままではちょっとダメなのかなというように思うんです。

【三井所清典委員長】

どうもありがとうございます。今、岩本委員からの意見は 3 つだと思います。初めは、あの時間の中でたくさん言いたいことがあるんだけど、言い切れないのではないかな。それは、焦点

をどこに絞っていけばいいのかということもあって、言い切れなかったのではないかと、ということもありました。焦点をどこに絞るかということと、言いたいことがたくさんあって言い切れないというのは、優先順位があれば発言が満足なものになる気もいたしますけども、結局やっぱり時間が足りないのではないかとというような気がいたします。それから、もう1つは、どうやったら延べ人数をできるだけたくさんにすることができるかという問題。最後には、具体的にアンケートも取った方が良いのではないかとという提案でございます。

【菅野博紀委員】

実際に、またブログに書かれたら困りますけど、変な風に。書かれたら困るようなことを書くような会議はちょっと問題なんですけど、馬鹿な政治家だと思いますけど。普通に考えて、アンケートは今回大事だと思うんです。インターネットがあることでどこからでも入って来れるんです。まず本当に、この前言った場所の選定、あと、双葉にいつ帰れるのかという一番重要なものが、まだ出てないんです。そこが大枠で全然違うことと、その第2ステップに入る仮の町。仮の町になった時に、複数なのか、1カ所なのか。今これだけ1年半も時間がかかってしまったのでは、それなりの生活ができたという人も出てきているんです。そういう意見を聞くために、アンケートの後ろに意見を聞く欄を作ることによって、議会の50.何%を出した時に、ほとんどの方の回答で裏にいろんな事が書いてあるんです。町の人口はどうなっているのか、議会できないことまで、全部町民の方の本音の意見が入って来ているです。双葉町はいやだという意見もあれば、俺は双葉に帰りたいんだという意見もいっぱいあるんです。お年寄りのことを全然考えていないのかなと、この復興会議では。出てきなさいではなくて、やっぱり出て来れない人達がいるんじゃないですか。郵便が来て、郵便を出すくらいのは出来ても、そういう多くの人達の意見の集約は、ほぼできないと思うんです。ノートを渡されました。子どもと一緒にですね。うちの子どもに渡され、何を書いていいんですかって、出てくるじゃないですか。それだったら、1回普通のアンケートをきちんとした本当に簡単でわかりやすいようなアンケートをこの委員会で、みんなで作成した中で、出してから、このノートなりなんなりということの説明を簡単にできるようにやっていかなかったら、インターネットだけでは、そういうのに来いというのは、絶対にありえないと思います。だから、本当に出せるものは、出して欲しい。何年後に帰れるのか、というのが一番大きな問題でしょう。それで、本当に場所を決めたらできないと言うけれど、場所も決まらないままに復興まちづくりってどういうふうにやるのか。パネルディスカッションって実際にこの前のやり方というのは、ある町のまちおこしとか色々な逸品とか、そういうのに使うものであって、ないものを空想でやっても、夢物語で終わってしまう。そういう確たるものが、ある程度この委員会の大事さというのは、行政と話をしながら進めていかなければいけないというのは、絶対にあると思うんです。結局は、本当にいつ帰れるか分からないのに、これをして実になるんですか。第2ステップの場所の選定にしても、それが一体どこかって分からない中でやっていって、本当の意見が聞けるかということなんです。例えば、本当に場所を書かない中で、第2の町ができるとしたら、普通でも大丈夫ですかとか、どこがいいですかと自分で書き込みができるような限定をしないと、本当の意見が最初から出てこないと思うんです。今、うちの町で1番多い所は、いわきです。いわき市にいっぱいいるというのは、その町が自分の地元に似ている環境だからこそ、いると

いうことも考慮してあげなければいけないし、やっぱりそういう意見を聞く、アンケートというアナログに戻ってやるのが、1番大事だと思うんです。それでも、会議がどんどん進んでいて、本当の意見聞けないままに終わってしまうような感じになると思うんです。聞いている、聞いているという言い訳になると思うので、やっぱりアンケートの大事さというのを出さないといけない。

【三井所清典委員長】

岩本委員と同じように3番目のアンケートというのが1つあります。それから、場所を選定してという、菅野委員も福島会議に最初のうちお見えになっていたんですが、そういう場で菅野委員の今のこの重要な場所とかいつ頃帰りたいとかいう意見をおっしゃっていただいて。

【菅野博紀委員】

言っていました。

【三井所清典委員長】

そういうことが出てくれば、皆さん同時に見えるし、後の記録でも出てきますので、こういう意見も言っているんだとか、ではこういう意見を言おうとか、皆さん思うようになるんですね。だから、日々そういう意見が町民から出るように率先して意見を出していただければいいかなと思います。

【菅野博紀委員】

そういう否定的な話ではなくてです。

【三井所清典委員長】

否定していません。肯定的にです。

【菅野博紀委員】

肯定的ではなくて、ある程度のものを用意しないといけない。

【三井所清典委員長】

それはアンケートの話ですか。

【菅野博紀委員】

夢物語になって終わるということを、僕は言っているんです。本当に何にも決まらない中でやるんだったら、アンケートの土台を作って、せつかく45人もいる委員会で、皆さんすごく双葉ではそういう人たちがいるので、ある程度の土台をきちんとこの委員会で町長名で集まって話した中で、そのアンケートの作り方を1番最初にやらなければいけないと思うんです。今、土台がないので。

【三井所清典委員長】

私は、一町民ではございませんけれども、だぶん、こういうことをお考えになるのではないかと、ご意見が出るんじゃないかという、いろんなことを想像はしているのですけれども、想像しているものの中に今、おっしゃっているのは全部出てくるんですね。どことか、どこがいいとか、そういうことが自然と出てくるのではないかと、私は期待しているのですけど、出てくいですか。いかがでしょうか。

【鈴木浩副委員長】

今回の原発災害というのは、1発のアンケート調査や1発の会議で物事は決まらないし、時々

刻々町民の方々の今後の対応についても、3 か月前、1 年前、みんな少しずつ変わってくるんです。だから、今のようなお話を聞いていて思うのは、いろんな人々の意見を出来るだけ正確に、今の時点の状況を探り当てる方法をより組み合わせるべきだってふうに考えるべきじゃないですか。そういうふうに考えればいいわけで、これしか方法がないと今、議論していてもあんまり議論が進まないの、いろんな方法を組み合わせながら、1 番今回重要なことは、3. 11 以降に、例えば、福島大学が 6 月にアンケート調査やりました、双葉 8 町村。あの時点から 9 月にやってみる、1 月にやってみると少しずつずれていくんです。そのことが今の実情じゃないですか。だから、できるだけ正確に町民の意見を聞くには、どういう方法があるか。場合によってはアンケート調査を組み合わせましようとか、いろいろなことを考えていく、その工夫は必要だと思います。

【菅野博紀委員】

鈴木委員の意見がまるっきりその通りです。

【鈴木浩副委員長】

そうですか。ありがとうございます。

【菅野博紀委員】

別に、否定するようになってきているんですけど、実際にこちらの会議にですね。どうしてかと言うと、なんでそこに推し進めるのかなと。パソコン使えない人とかがいっぱいいる中で、やっぱり聞かなければならない意見ってあるわけじゃないですか。それには参加できるような段階に多く、1 個でも多い意見集約をできる場を作らなければいけないと思うんです。そのアンケートにしても、会議にしても、これ 8 回だけで終わるわけじゃないと言っているけれど、期間で考えていけば、アンケートであれば、3 か月に 1 回とか、例えば出来るわけです。それで、この本当に進むべきものというのは、顔が知らなきゃ、やっていく中では、別に俺はこれを否定はしないです。ただ皆さんが、委員としてそういうものを出した中で、いろんなことを考えながら、アンケートなりを使いながら、顔を出していくということは、これは大事だと思うんです。これをそういうものに使うんだったらいいと思いますけど、パネルディスカッションを否定するわけじゃなく、いいことだと思いますが、今回に使うようなことなのかとか、場所だって本当に同じようなものをやった時にみんな変わってくると思うんです。将来、子供のこととかを考えて、やっぱり仕事の関係とか出てくるから、そういうのも勘案しながら期間、期間でやらなかったら、何も進まないと思うんです。それをやることによって意見を聞いてもらえるという町民の方々の精神的のものにもなるのかなと思うんです。これでは僕、これだけだと一方的だと思います。

【三井所清典委員長】

この委員の…。

【菅野博紀委員】

委員長の話聞きたいのではなくて、僕は鈴木先生の話を知りたいんです。

【三井所清典委員長】

委員の皆さんにはよく理解していただきたいと思うんですけども、鈴木先生がおっしゃったように、外部の条件、国とか他の条件によって自分の考えもどんどん変わった。変わるたび

に、これを1回送り戻すのではなくて、いつでも意見を出していただいていいというようにご理解してください。だから、意見を止めていることはまったくなくて、いつでも今の自分はこういう考えだ、こういうことに関してはこういう考えだ、ということを送っていただければ、インターネットの方はどんどんインプットしていただければありがたいし、葉書で書いていただいても一向に構わないのではないかと私は思うのです。そういうものとアンケートというのは、今後検討するテーマというように思っています。

【清水修二委員】

福島大学の清水です。どうぞよろしくお願いします。福島会議に私参加できていないんですが、まとめを読んだ印象では、参加者の間ではかなり苛立ちがあるというように思います。どうも問題の設定、カテゴリーの設定の仕方を単純に受け止めますと、平時の、つまり通常の状態におけるまちづくり計画を作るような手法のような気がします。でも、現実はそのような状況ではまったくなくて、例えば、文化の問題、教育復帰の問題を考える時に、どういう状況を想定して考えたらいいいのか分からないわけです。今のこの町民があちこちにばらけて戻れない状態のもとで、文化を、あるいは教育を語ればいいのか。いや、そうではないと、戻るという前提で議論するにしても、いつの話なのか、その時に自分の家庭はどうなっているのか、そういう議論の前提が分からないのだと思います。だから、こういうふうに言われた、あまりリアリティを持った意見が出にくいというのが実情だと思います。おそらく、委員会の方としてはあまり方向付けを、外からやらないでフリーな議論をしたいという意向だと思いますけれども、ただ、避難からもう1年半経った状態で、どうぞご自由にというふうに言われても、町民からしたらそれは困る、という気持ちは私はよく分かるんです。町長何故出てこないのか、という意見が出てくるのは、そういう押し付けではないけれども、とにかく問題設定を明確にしてくれと、あるいは選択肢をいくつか示して、議論提起してもらわないと、おそらくこれを繰り返しても同じ苛立ちが、毎度このように吹き出してくるというのは避けられないような気がします。平時じゃないんですよ、今は。

【三井所清典委員長】

菅野委員がおっしゃっている、いつという問題とどこという問題の2つを取って、仮にアンケートでその点をやってみると、何年後という話と、どの辺という話の想定はできますけれども、そういうのを提示して意見を聞いた方がいいという話ですか。

【清水修二委員】

いや、私は議論すること、ワークショップをやることは非常にいいことだと思っています。ただ、やり方なんです。どういう問題提起をした上で議論するか、という方法だというように思うんです。この方法でいろんなカテゴリーあげて、どうぞご意見を、というのは通常ならやりますけれども、今の事態のもとできちんと議論できる土俵ができてないと思います。

【鈴木浩副委員長】

清水さんの言っている主旨はどういうことかと言うと、大変な緊急事態の中で皆さん方が例えば、福島会議をやります。そこでは仮設住宅に住んでいる、みなし仮設に住んでいる、自主避難をしている、そういう毎日の生活が大変きつい中でやるわけです。そのことを率直に意見として聞く場面はあるのかどうかということが今、迫られているような気がします。私は福島県

の復興ビジョンを考える時にもそうなんですけれども、今回の原発災害は、正直に言うと復旧、復興の過程にかなり時間がかかります。例えば、仮設住宅は2年3か月と言っている。3年に延長した。3年で次の展望ありません。では、3年に延長したとして、仮設住宅やみなし仮設が閉鎖された時、次どうするんですかという不安が真っ先にあります。こういう今、現実には皆さんが抱えている不安をきちんと受け止めるということが、1つの柱としてあるんじゃないんですか、例えば。というようなことを清水さんが緊急事態の中では1つ設定の仕方としてあるんじゃないかというのを僕は感じる。だというのが、清水さんの本位とは違うかもしれないが。

【菅野博紀委員】

確かに何かを問題と違うことを、まずは不満を1回吐き出させてから、問題に入っていけないのかなというのも実際にはあります。言っている僕たちだったら、立場で怒られることですが、お前ら何やってんだと怒られることがあって、その話を聞いてみると、この中に入って行けるという話が出てきます。確かに、清水先生が言うように平常時と違うというのはごもっともだと思います。僕もそれに関しては大賛成ですし、鈴木先生が言ったそういう場を作るということによって、次に進む大きな原動力になるのかなっていうのは、僕もすごくいい意見だなと思うんです。

【高野重紘委員】

先日の福島会議に私も出席して、笑顔というグループで私がリーダー的に話をまとめさせていただきましたが、私のグループとしては、率直な意見も出ましたし、本当に顔を見て、皆さんも顔を見て話ができる。アンケートも確かに菅野君の言った通りに必要だけれども、あのよう

に皆さんの顔を見ながら話をまとめる、これはものすごく私、福島会議は有意義だと思っています。私のグループの中では、私がまとめたんですが、最終的には、この前言った放射線量が低く、子ども、孫たちが安心して生活できる場所とか、温かくて雪が少ないところ、そういう今までの双葉町の環境のようなところをお願いしたいということも出たし、その他に交通の便利が良いところ、就職が確保できる場所とか、教育が熱心で人材を育てる場所が必要だとか、病院、医者が確保できる場所とか、あともう1つは地震の関係で断層がないところとか、そういう意見が私たちのところのグループでは話がうまくまとめることができたと思ひまして、私が発表したんです。やっぱりみんなの顔を見ながらまとめるという会議そのものは、私は有意義だと思います。当然アンケートも必要だし、色々の方法を総合的に合わせて結論をつけた方が私はいいと思います。

【井上六郎委員】

今、話されている事柄の裏付けとして、7月下旬の頃、実は委員会から意見書を求められているんです。皆さん方に行きませんでしたか。その分析をどうしたのか。おそらく分析をしていない。いつ意見書を公開するのか、こうすると今、菅野委員が言ったことやアンケートの裏地をしっかりとしなければならぬんだということを、私もあの意見書を書くにあたっては十分考えました。それであの意見書の集約率がどのくらいになっていますか。

【三井所清典委員長】

委員長にいただいた。1回目の後で…。

【井上六郎委員】

それが今の話しているすべてなんです。

【三井所清典委員長】

21 人の方からご意見をいただきまして、ありがとうございました。

【井上六郎委員】

21 人ですか。そうすると、どのくらい興味関心があるかどうか、どう判断しましたか。

【三井所清典委員長】

本当にいろんなご意見がございました。そのご意見を、僕は最初にお礼を申し上げて、せっかくいただいたものを事務局で打ち直したものですから、それを見ていただいて、それで良ければ、できれば皆さんにお配りするのがいいかなと思っております。皆さんそれぞれに見えていただいて、さらにこういう意見が出ているんだから、自分はこういう意見を出そうかな、というような、更なる意見を出していただくのもいいかなと思っております。

【井上六郎委員】

それで私が考えたことは、集約型と分散型と、それから職の問題。そういうことに渡って、だいぶ悩みました。でも、それが全然評価されてきていない、ということを感じました。

【三井所清典委員長】

今日の会議で、実は私も、皆さんに如何にしたら貴重なご意見を読んでもらえるようにできるか、ということに思いが強くなっていたものですから、それを分析して今日発表する、全員の方でもないですし、そんなふうに思っておりました。できるだけ早く、できれば他の方にも読んでいただければと。この前提案いただきましたのは、個々人がこの場でいろんな思いを述べると時間が足りなくなってしまうので、紙に書いて出してはどうかとご提案があって、それを受けてご意見をいただくようにさせていただいた話なのです。

【井上六郎委員】

で、あるとするならば、会議の持ち方も当然変わってきたはずなんです。

【宇杉和夫委員】

宇杉です。8 回これからされるということで、第 1 回はこういったテーマだったかということ、平常時の今までの双葉町はどうだったのか、ということと、あとはその他にどういう問題があるか、ということをご一緒に聞かれていると思うのです。それをずっと繰り返すことはないです。ですから、1 番最初にやられたことが決して悪いことではないと思います。その余裕があるかどうかは別として、結果として平常時の双葉町の環境がどうだったかをちょっとまとめていただければいいと思うんです。あと残りのその他の問題がどういうことがあるのかということをもとめてもらって、あとの 7 回をどういうふうに組み立てていくか。同じことをやっても皆さんたぶん不満が募るばかりですので、このアンケートが、その時余裕があるかどうかは別として、せっかくアンケートが出ていますので、8 回の 1 番最初にこの緊迫した状況ですが、もう少し我々は余裕を持って、双葉町の元々いいところを考える、それはいいやり方だと思う。ここで、相当出ていますので、それを今まで双葉町どんなに豊かかということを中心に整理して、その他にもあと半分は、今どんな問題があるのかとか書いてあるんです。中身は書いてありませんが。どういう問題があるかということ整理できますよね。この 2 つを整理していただいて、それをどなたかがするか、みんながするか、一人一人がするか、私もさせてもらえるの

か、分かりませんが、その結果として、双葉町にこれだけいいところがあるということは皆さん分かっていることだと思いますけれど、その後の問題の方について、基本方針をどういうふうに考えるかとか、決めるには何を聞かなければいけないのか、そういうのを1つ1つ詰めていけばいいんじゃないかと、第1回目としては大変結構なのかなと、私は思うんです。

【三井所清典委員長】

整理をしていく。

【宇杉和夫委員】

はい、特にその他の方に書いてある課題の方を整理していただきたいと思います。

【三井所清典委員長】

その他のところもテーマがあって整理していくつもりです。

【木村真三委員】

実際、本当に町の復興というものを考えるとすると、まず、期限を限定してやらなければならないし、どんどん時間が経っていくうちに気持ちが変わってしまう。でも、ある時点で集約してしまわないと、次に進めないんです。僕は、実際福島県内の被災地域に住んでいるんです。住んでいるのは、自分がどこそこに住んでいるのではなくて、ホームステイしているんです。ホームステイしながら、現地の大変さとか辛さとか、問題というのを全部抽出しながらやっているんです。そういう中で話をするというのは、学者の立場の議論がどうのこうのではなくて、実際、現実問題として一番の問題は補償なんです。この補償問題に対してどうすべきか、例えば、井戸川町長が言っているように、全町一括で帰還困難地域にしてほしいとか、これをするにはどういう意味合いがあるのか。段階を分けて、国が言っているように、帰還可能地域であるか、帰還困難地域であるか、そうすると出てくるのはお金なんです。このお金の問題が一番の問題です。僕、相当いろんなところに行って、様々な人たちとほとんど、けんか腰を含めて議論してきた中で、やっぱり生活の糧がどうなるのか、自分たちの補償がどうなるのか、早くどうなるのかをはっきりしてほしい。これは新潟県も栃木県も、今回、この加須市に来ましたが、県外に避難されている方の様々な声を拾い上げてきました。その結果として感じるのが、はっきりしてほしいんだというのもどこかで線を切らなければ、ずるずるといったら、結局国の思い通りなんです。国の思い通りということは、これは分断ということです。同じ町民が丸になって動こうというなら、それはそれでいいと思います。それが補償金問題で、あそこはこうだから、ここはこうだからとなってはおしまいなんです。このまちづくり自体をどうすべきかというのは、そこから入って、実際、議論に立ったうえで、直接、アンケートならアンケート、若い人はインターネットを使う、お年寄りには絶対使えないんです。お年寄りは回覧板がいいんです。そこまで僕らはやっているんです。やった中で、こういう戦いになっているんで、それを分断にするのではなくて、そこから町がどう発展できるか、再生できるか、そこを議論の中心としてやっていくというのが、原点じゃないかなと思います。原点をまずは見据えて、各項目別の質問を作っていくとか、もう具体的にどんどん入っていかなければ、時間が遅くなるばかりだというのが、菅野委員とか皆さん、それと町民の方々の思いではないかと思います。僕はそれが大切だと思うんです。時間が経てば経つだけ、みんなの心は離れます。離れないうちにきちんと手を打つべきです。この手を早く打つべきというのは、集中してやることは集中

審議でやるというのが、僕はこの会議が成功する一つの事例かなと思っています。以上です。

【三井所清典委員長】

はい。別の意見はございますでしょうか。あるいは同様の意見でも。

【伊澤慶昭委員】

同じような意見にはなるんですけども、方針が決まらないとか、ビジョンが決まらないとか、何をすべきかというのが見えていないというのがあって、今、仮の町構想の話がメインでできていますけども、実際、私自身は、仮の町ができたとしても住みません。間違いなく住まないです。でも、今の双葉町が住めますということになったら、間違いなく戻ります。だから、そこら辺をしっかりとさせないと、仮の町構想の話をしますということなら私は参加しないです、間違いなく。ただ、今の警戒区域にある双葉町がどうなるのかという話にはすごく興味があって、だからこそ、こういった場にも出て来たいと思っているんです。だから、そこら辺の話がしっかりしないことには、意見が別れると思うんです。自分たちは戻りたいとか、仮の町を作りたいとか、別々にいると思うんです。そこら辺が、はっきり決まっていない。この話し合いではこういう話をしますというのを決めないと、目的が違うところに行っても話にならないと思うんです。やっぱりここで決めるのは、そういう話し合いの趣旨というか、細かい方針を決めておいて、それから復興会議という形に入らないと、本当にしたい話をする場所じゃない所に行くことになってしまうと思います。なので、やっぱり同じような意見になってしまうんですが、細かい方針を決めていかないと、今後、会議としては進んでいかないのかなと思っています。

【三井所清典委員長】

今のような意見、この前の福島の会議では、やっぱりおっしゃるように、150年経っても帰れないから帰らないっていうご意見もあって、150年じゃなくてもっと近いうちになるかもしれないし、もっと中間的な時限に戻れるかもしれないし、まだよくわからないけれども、戻りたいけれども今は帰らないって思っている人もいます。そういう人も、一緒に意見を出し合って話をしていくということでないで、双葉町の意見にはならないわけで、仮の町の話になる時、私は参加しないというということではなくて、そちらの場合でも、どういう思いの人がそういうふうになっているんだろうかということをご理解いただきながら、自分の考えを述べていただくということをお願いしたいと思っております。

【伊澤慶昭委員】

まずは方針を決めないことには、私たちとしても納得して話を進められない。

【三井所清典委員長】

ご自分の方針でご自分の考えを作っていくというのは難しいのでしょうか。例えば、帰るという前提として、どういう条件が整えば帰るんだってという話とか、そういう条件が整わなければ帰れないんだという話であるとか。

【伊澤慶昭委員】

そういう話をしたいんです。仮の町を作るのか、そうではないのか、まずはそこをはっきりさせたいというのが今出た意見だと思います。先にそこを決めてから話すべきではないかということです。

【三井所清典委員長】

その気持ちはよく分かります。そういうテーマがたくさんあると思います。。

【宇杉和夫委員】

繰り返しますが、やはりいろんな差し迫った状況がたくさんある。決めなければいけない。それで今までのものを吐き出さなければならないということもありますが、基本は、双葉町という前の町が、良かったか悪かったか、基本的にはそれです。これでそういう方針が出ているじゃないですか。そこをきちんと確認して、そこが本当にいいのかどうかというのを確認した上で、決めるべきものが何かっていうのをこれから話し合っていくわけですが、町についてこういった意見が出ているということは、余裕がないってことは十分分かりますけれども、まずは元々あった町が良かったか、そこをまず愛するってことがはっきり分かってから、いろんな段階を進めていくという意味では、そんなに悪くない気はする。ただ、その後をどう続けるかっていうことを確認するので、それら一つ一つをバラバラにしちゃいけない。それを積み重ねて行って、最終的に何をやるかっていうことを、みんなで共通する問題はたくさんあると思うんです。それがただうまく歯車が噛み合いませんので、まずは、せっかく出てきた双葉町の良いところをみんなで確認して、それから帰る、帰れなかったらどうするかというのは共通の問題ですので、それを順に考えていくということで肯定的にいきたいと思います。

【井上一芳委員】

私は、構想を出す方の立場にあって、まだ実は悩んでいるというのが実態です。どういうふうに方向づけていこうか、どんなものを考えていかなければならないかということで、悩んでいる段階です。今回、福島のとめを見させてもらって、1つの町として、先日どちらかの説明会で「帰らない方は」という話があったんですが、町民で双葉町に帰らないっていう方は1人もいないと思います。全員帰りたい。それくらい素晴らしい町だと自分たちの町を思ってきていると思います。その中で一度だけ福島の状況がつかめた段階です。私は今、急にまとめるというのではなくて、町民の意見をもう少し聞かせていただいて、それを中間的にまとめて、次回の委員会の時に部会を検討しようということを考えています。その部会を検討しようという時まで、もう少し時間をいただいて、町民の意見、今現在は68名の意見を聞かせていただいていますけれども、もう少し町民の皆さんの意見を聞かせていただけないものかなと、私は思っているところです。

【西内芳徳委員】

何にしても、あんまり悠長なことは言っていられない状況だと思うで、待っていられない人たちというのは相当数いると思うんです。現実、民間でもいわき市にゴルフ場の借上げっていう構想も出ていますし、そういった状況を委員長はお聞きになったりしていますか。

【三井所清典委員長】

土地の提供とか、移転先とか、もっと素晴らしいところはないかとか、話に聞いていたり、思ったりはしています。

【西内芳徳委員】

民間で、双葉郡として7000世帯に分譲するとか、具体的に話が始まっている事例をお聞きになったりしていますか。この会議が遅くなることによって、もし仮の町候補地自体が別の場所

になったら、町が分断してしまいます。整合性というか、もう少しそちらの情報収集が必要かなと思うんです。

【三井所清典委員長】

それは、分かりました。委員の皆さんは、発言するチャンスや顔を合わせるチャンスが多いものですから、是非、意見や意向を直接出していただいていいと思います。それはこの会議の中で時間的に出せないということであれば、ノートのような形でも何でもよいので、出していただければと思います。今のような問題も、こういった問題もあるよということを出していただければよろしいんじゃないかと思います。アンケートを待つまでもなく、会議を待つまでもなく出していただければよいと思います。

【清水修二委員】

部会を作るという提案が出ていますけれども、例えば、教育の部会とか、福祉の部会とか、そういった部会を作るんだったら意味はないと思います。そういう事態ではないのであって、例えば、仮の町の設計を考えるととか、補償問題の処理の仕方とか、事態は非常に切迫して具体的なんです。だから、部会っていうものを考える時でも、そういう方針を持って臨むべきだと思うし、そういう部会で検討する材料を、きちんと町民からすくいあげるという方針を持ってこういう会議を開いていかないと、それはさておきで終わってしまっ、次の段階に進まないような気がしてしまいます。

【三井所清典委員長】

部会の提案は、第1回で基本的に出ました。それでどういった部会を持った方がいいかということは、今おっしゃられたように、少し皆さんの意見を聞いていきたいと思います。

【清水修二委員】

とにかく平時ではないので、通常のやり方では絶対だめです。

【木村真三委員】

答えは皆さん、もう持っています。町民は持っているんです。その町民の代表者が決めてくれば、それについて僕は意見を出します。それでいかがでしょうか。そうじゃないと時間が止まってしまいます。必ず皆さんの問題点は、様々な地域から来られていますけれども、その問題点は、答えがほとんど見えていますから、もうそれで出してください。そうやってください。そうでないと先に進みません。

【高野泉委員】

今、この復興まちづくり委員会として、議題は、検討の進め方ということをやっているんですが、いろいろな委員の、45人いれば45通りの意見が出てくるわけで、また、山に登るにしても、頂上までいろんなルートがあっていいと思うんです。ただ、私個人的に考えるのは、先生が言ったとおり、もうはっきりしてほしいというのが町民の考えだと思うんです。双葉町の復興まちづくりは、54平方キロメートルの元の双葉町に戻って復興するのか、あるいはどこかで復興させるのか。そういった方向性がないと、この福島でやった会議でも、いろいろとどうなんだと出ています。私はいろいろな意見が出てきて、果たしてどこにどうなんだというのが町民の中に出ているんだと思います。そういう人に聞けば、戻りたいという人は、おじいちゃんおばあちゃんだけで、我々60代以上の人が戻りたい。故郷があるわけですから。でも、私

らの子どもに聞くと、申し訳ないですけど戻りませんよと。放射能がじゃあ大丈夫なら戻ると。研究されている先生方にははっきりと危ないとも、大丈夫だという人もいますし、ただやはり、復興まちづくりとしては、事務局でもある程度そういうものを作ってきていますから、そういった中で進んで、そして今の意見を修正しながらでも取り入れて、そうでないと、いつまでも進め方を検討しているうちに、もう4時半になってしまいます。小説の八甲田山と同じで、かじ取りがいったいいたのでは絶対にまとまりません。だから先生が、委員長ですから、まとめてもらって、そしてそれに皆さん委員が意見を出して修正して、双葉町をどのようにしていくのか、はっきりしていった方がいいと思います。一人ずつ45人の意見はもう出ていると思います。私も意見を出しました。ただこのまちづくりそのものが、どういう方向になるのか。福島県の人口はどんどん減っていますし、減少率は確か福島県が一番でした。そこで、本当に戻れるのかどうかというのもあります。戻れるようだったら、きちんとした格付けをはっきりして、大丈夫ですよと、だから福島県に戻ってきてくださいと言うような方法もあるでしょうし、その辺をはっきりして今は進めて、事務局の案もきちんとしたのができていますし、それからここで修正して、短時間で決めていった方がいいのではないかと、私は思います。

【鈴木浩副委員長】

今おっしゃったように、例えば、年配の方が戻りたいという気持ちはよく分かるけれども、例えばの話、浪江町では、津島だとか大堀地区は戻れません、具体的に言うと。それと同時に、戻れないってことは、100年先ではないんですけど、30年間ぐらい無理です。自然の低減を見ても、蓄積放射線量の低減マップを、私は町民に全部お見せしました。その中で、どうやったらその時間を繋いで生きるかということに変わっていくんです。そのことが今重要で、その時にどなたかが言ったように、それは仮の町なのか、今、避難している所での生活再建の支援方法を考えるのか、もうちょっと言うと、今、地域区分を3区分に変えようとしているけれども、これは結局、賠償・補償の関係で、6年間は戻らないようにしないと全額賠償にならない。だから、首長さんは合せて6年間、これからは5年間、もう戻らない方針を決めましたとなるわけです。早く戻りたいという気持ちと、5年間は戻らない方が良いのかという決断を迫られます。そうでないと全額賠償にならないという、そういうことです。なんかこの制度そのものがおかしいんじゃないかと思うけれども、でも今、その中で決断を迫られているというのが事実。そうすると私は、若い人は仮の町には住まないかもしれないけれども、選択肢の一つとしてそれはあっていい。というのは、先ほど言ったように、3年後、これから言うと具体的には2年後には、仮設住宅も、みなし仮設も消去されるんです。そのあと、そこに住んでいる方々はどこに移り住むんだと。あとは自力でみんないいんでしょうか。その時に、やっぱり一定の居住についての確保を選択肢として考えなくてはいけない。みなし仮設も、これから我々の権利として勝ち取っていかなければいけません、延長だとか。仮設住宅もそうだけど、あんな水準の低い、6坪だとか9坪だとかいうところに住み続けるんですか。だから、よりましな仮設住宅であれ災害公営住宅であれ、生活の質をもうちょっと高める工夫をしましょうというのが私たちの選択肢です。こういう選択肢をたくさん用意して、一人ひとりの方が判断する時に、私はこの選択肢に乗りたい、私はあの選択肢に乗りたい、一本筋であっては絶対に合意できません。そのこの部分の選択肢を戦略的に考えるというのが今の時期ではないですか。もう一つは、先程

来、出ているのは、私が思いますのは、やはり部会の設置の段階でいいのかもしれませんが。9月の段階で。私は、今の事態は、国だとか県の方針が次々と新しいことが出てくるので、極端に言うと、復興交付金だとかいろいろな予算取りのことを含めて、もっとももっとたくましくならないと、双葉町は予算取りができなくなってしまうのではないかと、つまらないことで僕は心配しています。そんな国の制度もぶち破りたいと思うんですが、そうすると今の原発災害についても、例えば、廃炉の問題、工程の問題、除染の問題、補償の問題というようなことそれぞれを、今、国の状況、県の状況はどうなっているのかという情報を、皆さんと共有しながら決断していかないといけない。戦略を考えないといけない。その部分は、部会という格好で落とし込めばよいのかどうか僕はよく分からないけれども、そういう課題として設定していかないと、皆さんから、俺たちはこうしたいけど実際のところどうなんだということが、これからずっとついて回ってしまいますよ。井戸川さんが、やっぱり最終的には1ミリシーベルトを実現するぞということをずっと言っておられます。あれをこだわり続けたらいつになるか分からない。具体的な戦略をこの中で、1ミリシーベルトは最終目標だけど、そこにたどり着くための戦略を考えないといけないのが今です。例えば、5ミリシーベルトの段階までいったら、それは集中的に除染をするという方法は思い浮かぶんです。150ミリシーベルトある所をどうするんですか、1ミリシーベルトって。と、いうようなことを、具体的に考えるという課題は目の前に横たわっているんで、それを戦略的に考える課題として、我々の委員会の中に、ある種専門的な知識を使いながら、こういう課題を前提にしましょうということを考えないと、皆さんが考える時に、空中分解しちゃうというのは、そういう不安があるからだと思います。だから、戻りたいという気持ちは分かるけれども、今のところ双葉町は、中間貯蔵施設の周辺の問題等を含めると、しばらくはやっぱり、別の方法を考えるっていうのが具体的じゃないですか。戻りたい気持ちだけを引きずるわけにはいかないじゃないですか。

【岩本久人委員】

今の鈴木委員のお話に尽きるとは思うんですが、私の話なんか及びもつかないと思うんですが、さっきも言ったように、復興計画の理念というのは、最終的にはふるさとの再生なんです。町の方針はふるさとの再生。ということは、やはりふるさとに戻るということを前提で、復興計画は皆さんの合意のもとでやっていかないと計画にならないと思うんです。どこの町の計画だって、最終的にはふるさとに戻るっていうことを前提で計画を立てているわけですから。

【鈴木浩副委員長】

念のために言いますね。浪江町は違います。その前提が違っていることだけ言っておきます。

【岩本久人委員】

部会の話ですが、清水先生からも出ましたが、テーマごとに部会を作るというんですけれども、ではどういうテーマなんだということもきちんと考えなければなりません。いくつのテーマに分かれて部会を作るか。浪江町は、6つのテーマに分かれて部会をやっています。やはりそれは、短・中・長期的な視野に立って、これからの計画を作っていくと、部会の構成もできないと思うんです。今やっぱり、厳しい避難生活をしていて、仮設住宅とか借上げ住宅とか、ここ2、3年、町でどういう支援ができるのか、また、町民の皆さんはどういうことを求めているのかという短期的な計画と、中期的な計画になるであろう仮の町についてであれば、実際

に1か所に作るのか複数に作るのか、あるいは仮の町なんかいないという人もいますから、そういう意見も集約するということです。最終的には、やっぱり先生がおっしゃったような、線量とか除染の問題もあります。それを乗り越えて、やはりふるさとに、どこへ帰るのかということを考えなければいけないことだと思います。そういうふうに、テーマをいくつか持って部会を作るか、それによって、7000人とかアンケート調査もやり方が決まってくるんだと思います。そういう話し合いをしていかなければいけないと思います。

【鈴木浩副委員長】

今、途中で話を入れてしまいましたけれども、浪江町の場合は、復興ビジョンを4月の段階で確定して、今月中に復興計画を決めます。最初に出されたのはふるさと浪江の復興だったんですけど、全国に避難している人たちの話を聞いて、復興計画の中に短期・中期・長期があるとすると、短期の段階では、ふるさと浪江の復興では実現できないんです。今、一人ひとりの避難している人たちの生活の再建を支援することが中心ではないですか。これを私たちは最初の理念に掲げて、それを通して、その中でふるさとの再建ができるところからやっていきましょーと、第一の理念を逆転させたんです。役場が考えるとふるさと再建になるんだけど、避難している方一人ひとりの住民にとっては生活の再建なんです。生業の再建なんです。そのところはやっぱり議論していくと、地域に、被災地に、被災者に寄り添うとどうなるかっていう話で逆転したんです。このことをちょっと申し上げたかったんです。

【吉田岑子委員】

結局、私もここ加須に住んでいますけれども、いろんな方の話を聞くと、やっぱり町長たるリーダーシップをとっていただいて、とにかく今は帰れないということをはっきり言ってもらいたいという意見がたくさんあります。帰れることに対して、1ミリシーベルトなんて夢のような話と、先ほど鈴木先生もおっしゃいましたけれども、帰れるのか帰れないのかということに対して、この復興委員会というのは帰れることを前提としてやっているものなのか、仮の町をつくって、とりあえずはそこに行って、帰れる日が来たら帰るというふうに段階を踏んでいくのか、そのあたりが全然見えていないということもありまして、とにかく、まず、町長から皆さんに、とりあえずまだ帰れないということを十分説明してもらいたいという声も出ています。そういうことをここではっきりしてもらおうと、自分たちも方向性が見えてくるし、若者たちは、ここに長くなればなるほど、子どもたちも学校には馴染んできていますし、帰ることも不可能かなって形になると思います。ここに先生方もいらっしゃいますけれども、俺たち職業失うだろうなということにはなってきます。首長にはその辺をはっきり答えてもらいたいというのは、一町民として思うことです。

【鈴木浩副委員長】

僕は少なくとも、ここの委員会のメンバー全員が、今、双葉町の蓄積放射線量がどういう分布になっているのか、だから一つの区域設定をする必要がこういうところにあるんだという、少なくとも蓄積放射線量マップをみんなで共有するというのは必要だと思います。すでに文科省では、復興庁が出しているんですが、5年後、10年後、20年後、30年後に自然に放射線量が減衰していくのはどういう状況かという地図が出来ているんです。浪江町の一人ひとりが、これはちょっときついなと、特に山あいの方は、これは戻れないなと、どんなに除染を必死にや

ったとしても、頑張っても半分にしかならないと、今の技術はそんなところですので、そうなる  
とやっぱりその科学的根拠に基づいて住民一人ひとりが決意をするということもあるんです。  
ある種、諦めのようなところもあるんです。そういうことを共有しながら町長が発信する。町長  
のカリスマ性にだけ偏ってはだめなので、科学的な根拠と両方必要な気がします。

【宇杉和夫委員】

私は皆さんと同じような被災を受けていないです。外から入ってきている立場ですので。ただ、  
今まで日本の住宅政策というのは、産業的な仕組みで必要なところに住むとか、あるいは住み  
たい人が住みたいところに住むというような方向でやってきていますが、それでは日本の国土  
の管理ができないんです。山の頂上のような人の住めないところは別として、明らかに人が住  
めて、これだけ環境の良い場所を、人が住めないというような方針を出すというのは、そう  
いう方針を出した後の国土の形ができていない。そういう環境を次の世代に渡してはいけない。  
これだけの遺産のある環境は、必ず元に戻してやるってことを決心しなければいけないと思  
うんです。ただ、それは時間が短いか長い、100年かかっても、自分の子どもに間に合わなく  
ても、孫にでもその後でも次の世代に渡せるようにやるということを決心したとする形が必要  
に思います。そうではなくて、困ったところを、やらなければならないことはやるけれども、  
我慢しなければならないことは我慢してでも、このテーマについてもやると、そこをまず判断  
するには、持続的なコミュニティの形成を、双葉町の町ではなくて、日本という国全体の中  
の方針の中でをつくるということも必要だと思います。そうした中で、先生のおっしゃる大変難  
しい問題は、全部クリアしなければならない。というのは、やはり、この双葉町の問題とい  
うのは、様々な流れの末端にあるのではなくて中心にあるわけです。ここで起こった問題は、今  
回の災害の中心的な課題として深く考えて十分に対処しなくてはいけないわけです。国土と地  
域を次の世代に手渡すというのが対処できないっていうのはおかしいわけです、現状の対処が遅  
れているからといって、次の世代への対処を省くことはできないように思います。そういう意  
味で、まず双葉町は、この地域は住むのにいい場所であったこと、それでこれだけよい環境を  
次の世代に引き渡そうと。私たちはそこをきちんと判断してからの方針がいいような気がしま  
す。

【三井所清典委員長】

できるだけ発言をしていただきたいと思います、いかがですか。

【松本浩一委員】

松本です。双葉北小学校です。双葉南小学校、双葉中学校、双葉高校と出まして、もちろんふ  
るさは双葉ですので愛着がありますし、ここで双葉高校の校歌を歌いたいぐらいですけれど  
も。今ですね、双葉北小学校のみなさんはご存知のとおり、児童は散り散りになっておりませ  
ん。前任は浪江小学校でしたが、浪江小学校は児童 560 人、22 年度当時ですが。昨年度 7 月  
に、浪江小学校に戻ってこないかと聞きましたら、たった 4 ヶ月しか経っていないのに、30  
人しか戻りませんでした。新入生は 2 人とか。富岡も同じように少ないんです。もう少し戻っ  
てくれるのか思っていました。ましてや、小さい子どもたちは、双葉北小とか南小というイ  
メージがないので、だんだん減っていくのかなという話です。それを考えますと、未来のまち  
づくりも、学校関係者としては、子どもたちと教職員と学校を再開して、いち早く近くに行き

たいと思っています。日々言うところと正直焦っています。まちづくりというのが簡単な問題ではないのは分かるんですが、学校に携わる者として日々思うところです。以上です。

【三井所清典委員長】

ちょっと私の理解を深めたいと思うのですが、双葉北小学校をつくって、双葉の子どもたちが双葉の小学校の通えるようにしたいという切なるご意向ということですね。

【松本浩一委員】

もちろんそうです。

【三井所清典委員長】

それでその小学校というのを、どこに作るのかという問題について、いろいろ考えていらっしゃるだろうと思って、今伺っておりますけれども。

【松本浩一委員】

場所云々はともかく、先ほど浪江と富岡の例を出したのは、4ヶ月でもその数しかないんですから、集まってくればいいけれども、だんだん難しくなっていくのではないかなという私の浅はかな予想です。子どもたちと早く仕事をしたいのと、正直。それだけです。

【宇杉和夫委員】

私もその問題が一番重要な問題ではないかなと思います。子どもたちがこれからどうするのかということ。これが最大のテーマだと思います。

【菅野博紀委員】

ちょっと委員長に言わせてください。委員長の認識じゃなくて、これはもう現実的に分かっている人の話なんで、もう少し勉強してほしいことと、あと今、子どもの件で意見出ましたけれども、木村先生の言うとおりでなんです。今、団地とかに入っていますが、田舎の子どもなので一戸建てにいましたから、もう大騒ぎなんです。それで、うるさいということも出て、一戸建てを借り上げるとかないままに、賠償に3ヵ月とか半年とか待ちながらも、自分たちで建て替えているとかいう問題も、すごく今いっぱいあるんです。だからみんな焦っているんです。お金の面でも、結局貯金を下ろしたりしていて、目先のものが見えなくなっている状況が、この1年半の避難生活で出てきているんです。だから、確たるものをきちんとしていかなければならないのと、戻って来たくないという気持ちもすごく分かるんです。だけど、盆とか正月に友達とかと集まる場所に使ってくれたりとか、そういうものでも復興の足掛かりだと思うんです。例えば、今の双葉町でなくとも、「仮のまち」が出来た時に、地元の友達が集まれる場所とか、大きな気持ちやいろんなビジョンを持っていかなければ全然話が進まないです。ある程度共通認識を持って話を進めていかないと、もう何のための会議か分らないです。実際には困っていることが山積しているから、どんどん前に進んでいかなければならないのに、遠回りしすぎかなという思いもあるので、もう少しまとめて話してもらえますか。

【三井所清典委員長】

私はもう少し審議をしたいと思っています。

【宗像邦浩委員】

すみませんが、1年半も宙ぶらりんの状態を経験してみてください。何の方向性もないまま。

【三井所清典委員長】

それで方向が出せるかという問題で、間違いのない方向とか検討を深めたいと思うものですから、今まで出せなかったという問題を含めて、少なくとも 45 人の委員の皆さんのご意見は、ぜひ町民の一人の意見として聞きたい。それは皆さん、はっきりいしてるとおっしゃっているから、はっきりおっしゃっていただきたいと思います。その方向についてもいろいろ重要な問題についても、この場で発言していると時間がなくなってしまうので、ぜひ文字で書いていただければいいと思います。

【木村真三委員】

皆さん、多分、かなりこの温度差というのを感じていらっしゃるんですよ。委員長、申し訳ございませんが、今の委員長の話しでまとめられていては、いつになるか分からないし、これを意見出しして、ああのこうのってことは出来ないと思うんです。僕が今話を聞いていて、一番具体例をもってお話しされているのは鈴木先生だと思うんです。鈴木先生は、本当にきちんと見られています。もしそれでやられるんだったら、もう鈴木先生、変わってもらって、それでやっていただいた方が、僕らはもう時間がないんです。やっぱり、僕自身もこの双葉町に関わる時間というのはなかなかないし、他に福島県内のことを一手に引き受けている立場もありますし、ウクライナももっています。だから、そういうところで、時間を有効に使って、できるだけ早く皆さんに納得していただくような方向に持っていくように、テーマを出していただいた方がいいと思うんです。理想論で言っても、もう無理だと思います。いきなりこんなことを言って申し訳ございません。ただ、そこまではっきり先生おっしゃってらっしゃったら、先生も腹を据えて。

【鈴木浩副委員長】

腹を据えるかどうかの話はいいです。ちょっと言わせてください。僕は、県の振興をどうするか、浪江町は毎月いっばいで復興計画を作ります。毎週です、委員会は。それ以外に女川町を持っていたりして、僕は本当にこの委員会にどういうふうに参加できるか分からなくて、今日ようやく時間が取れて、1 回目は参加できなかったんです。事前の打ち合わせも実は、出れませんでした。そういう中で、僕は、委員会全体の、あるいは会長副会長が事務局と一緒に議論すれば進行は進められることなので、もうちょっと言ってしまうと、双葉町のこの委員会ようやく始まったわけです。これまで遅れてきたことが、みんなの焦りになっていることはよく分かるので、この点は、交通整理はきちんと今やりましょうという段階に来ている。木村さんが言っていることは一番心強いので、これからもぜひ入っていただければいいのかなと思います。

【菅野博紀委員】

委員長にしても事務局にしても、選ばれた会社にしても、双葉町の現状を分かっている人いないです。担当課の課長だって国から来ている人でしょう。今の話で、はき違えているのが、それももう全然分かっていただけていない。多くの人の話が聞きたいと言うなら、最初から聞けばいいんだし、今の話を聞いていても、僕は認知的にもおかしいと思う。木村先生のお話を聞いた時に、できるのかなって思ってしまう。

【三井所清典委員長】

今のお話は分かっていますけれども、この会議は、まずどういうふうに双葉町の町民の意見を聞くかということの提案があって、それでコンサルが決まって、そしてそのもとで始める委員

会の委員で、その方針で進めるということが承認されて動いているというわけです。もう少し予定されているようなところの意見を聞いて、9月ぐらいの段階で中間になるという先ほどの説明もありましたし、私もこの会議のメンバーの方々は、どんどん早く意見を出したいとおっしゃっているので、本当に意見をいただきたいし、部会の作り方も、イメージが早く出てくればというふうに思うものですから、多くの町民の意見に基づいて復興まちづくりの計画が推進しているという、そういう形を双葉町がとっているということが、双葉町の復興まちづくりの基本だというふうに理解をしています。そういう意味で、予見というか、あらかじめ私なんかいろいろなことを想定して、考えているつもりですけれども、それは皆さんの意見を聞いた後に、私も皆さんの意見に多分たくさん影響を受けると思うんです。そういう影響を受けながら、復興まちづくり計画の方向みたいなものを、副委員長の先生方、何人かと相談しながら、皆さんと相談しながら決めていくというふうに運んでいきたいと思っております。それで、スケジュールは、一応決まっているスケジュールを、9月の中間報告までは進めていきたいと思っています。

#### 【中村富美子委員】

中村です。婦人の代表ということで出ていますけれども、この前、福島の方に帰って、婦人会の理事会をやったんです。そしたらもう、待っていたんだけど今頃かいというんです、この復興会議が。なんで今まで1年もかかって、やっと7000人の復興会議です。それをなんで早くできないのかと。もう、待って待って待ちきれなくて、死ぬの待っているのかとみんな話していました。それで、賠償問題にしても国の方では全然吸い上げてくれない。この苦しさは本当に誰が分かるんだと、双葉町の町民しか分からないだろうと、みんな涙流しながら話してきました。本当に、声を大きくしなくてもいいんですけれども、1年半も、私たちは本当に苦しい思いしている。子どもたちや孫たち、おじいちゃんおばあちゃんは意見をあんまり言わないでとか、帰れないんだから帰ってはいけないんだとか言われながら、でももう帰れないと思います。帰れないなら、30年帰れないですときちんと示してもらいたい。福島にいる人たちは、この頃はいわきの方に家を求めたり、土地を求めたりして、もう自分の足で立たなければ、誰のことも当てにできないんだよと言って、だいが家を求めたそうです。もう少し待っていてと言ったって、待ってられるのか。政府では何にも言わない。町でも、この復興まちづくりをどこに持っていくのか場所も言わないでいて、どこに待ってられるのかという意見でした。それで、私は復興会議に出ているけれども、みんなどうかと話を聞いたら、以前財政改革の会議がありましたが、その時に、どうしたらまちづくりを良くできるかという話し合いを持ったんです。それでこれ持ってきたら、何かみんな同じで、一回見たことあると。復興会議に行っている人がいると思います。なんか見たことあるタイトルだなんて思いました。また向こうから持ってきたものかと。これは、本当に前に話し合った会議なんです。絶対にそうだと。あれと思って見ました。これ本当に心からの意見をぶつけ合って出し合っていないと、絶対についていけないと思うんです。だから何とかみんなの意見を吸い上げて、一人でも多くと言うんですから、1年間かかって、さあ皆さんどうですか、どこ行きますかなんて悠長なこと言っていたら、本当に死んでしまいます。お金もない、住むところもない、子どもたちともみんな離れ離れになっているんです。そういうところをきちっとみんなで話し合いながら、会議に臨み

たいと思いますのでよろしくお願いします。

[会場から拍手あり]

【伊澤慶昭委員】

意見を吸い上げてもらいたいというよりも、まず先に決めてもらいたいということなんです。もう問題も分かっているし、話したいことも大体みんな一緒だと思うんです。だからもう決めてくださいというのがあるんです。何でもいいからはっきりさせてくださいという、短期的・中期的・長期的でも、もう決めてくださいという状態です。それを決めてから話を吸い出していくというのが順序じゃないかなと、最初から言っていたんですけども、もう1年半もほったらかされていると、早く決めてくれというのが先なんです、思いとしては。短期的・中期的・長期的でも、きちんと方針を決めていかないと、みんな待ちきれないと思います。早く決めていくことが先決だと思います。

【岡村隆夫副委員長】

今日皆さんの意見が、前回より少しモノが見えてきたような感じがします。それは今日、特に見えてきたのは、やはり専門の先生方が来ていただいたということがまず一つ。それで、前回の福島会議のアンケートの結果をちょっとまとめてみますと、先ほど皆さんから出ていたように、帰れるのか帰れないのか、中には明日にでも明後日にでも帰りたいという人もいますわけです。非常に迷っているという意見が圧倒的に多いわけです。だけれども、今日の先生方の話を聞いて委員の皆さんは、やはりもう帰れないという期間はこういう期間だということだけは分かったと思うんです。だからこの期間の中で、これから町民の人に、この不安を、知らないことを取り除きながら、町民の意見をもう一回聞けば、やはりもっと進み方が違ってくると思うんです。今、一番最初に出ていましたけれども、アンケートを取らなければいけない、まったくその通りだと思うんです。ただ、分からないところでアンケートをとっても、やっぱり正しいアンケート結果は出てこないですから、我々がこうやって意見をぶつけ合って、分かってきたことはどんどん専門的なところも入ってきているわけですから、こういうものを町民の皆さんが集まった時に、誰かが行って説明をして、それで早くどういうまちづくりをしたらいいのかということを、皆さんにぜひお願いしたいと思います。以上です。

【鈴木浩副委員長】

あまり三井所さんが自己紹介していないのかもしれませんが、山古志の中越地震があった後に、みんな散り散りばらばらになりました。災害公営住宅、自力建設を含めて、どういう住宅を作ればいいのかということを長年かかって、実際の設計を含めて関わってきたのは三井所さんなんです。それで、仮の町が一つの選択肢としてあるにしても、それだけでは済まないことははっきりしていて、では、先ほどのご意見のように、意を決して自分でいわきに家を見つけて動いた時に、この時の賠償・補償問題をどういうふうに取り付けるかという話なんです、この戦いは。そうすると今の制度でいうと、取り付けられないかもしれないんです。そういうようなことについての制度的な枠組みの欠陥だとか問題点を明らかにしながら、自力建設の場合も、それに補償をしていくような枠組み。岩手県では、最大1千万円以上はそれで確保できています。福島県はまだそんな制度ありません。そういうようなことについての具体的な戦略をこれから考えていかないといけないんだけれども、少なくとも皆さんが家を作りたいという

場合の、その方法だとかいうのは、山古志で、もがいてもがいて住宅づくりをやってこられたのは三井所さんなんです。多分今回もそういう意味があって三井所さんが参加しておられるんだろうと思うので、もう少し吐き出していただかなければならないと思うのですが、あまり出されていないと。だからそれはいろんな知恵がそれぞれあるので、専門家としての知恵を皆さん出しながらやっていけばいいのかなと思います。

【木村真三委員】

ただ、僕自身が思うのは、これは普通の震災災害ではないんです。放射能なんです。前提は放射能なんです。だからその放射能についての知識がまずない。どういうレベルでどうなって、鈴木先生もそうやって年数のことを言いますが、これが実際の現場で今どうなっているか、それも含めて考えていくのに、やっぱり私の意見はもちろん持っていますが、当然調べています。事故当時よりも今の方が、線量が上がっている地域もあるわけです。それは二本松市でも確認済みで、個人線量評価も全部やりました。ガラスバッチも渡して、そこで明らかに有意に上がっている地域が出てきます。そういうところも含めた上で放射能について、まず考えていかなければならない。その後に、その災害復興の話になるのではないですか。そうでないと、放射能の話が、実際にみんなが一番知りたいところで、これ本当に住んでいいのか、大丈夫なのかというのは放射能なんです。だから、まず普通の災害ではないというところを含めて考えた上で、僕はやらなければならない。それが今回の特殊性なんです。だから、その特殊性の部分で、やるんだったら僕はどんどん皆さんに指示もしますし、お話もしますし。それでいったいどうなのか。例えば 26 年後どうなっているのか。そのまま棄民状態で暮らしているチェルノブイリの方はどうなっているのか、そういうのも全部分かっていますし、今現在も住んでいます。そういうのも含めて話す。さらに復興再建という時に、例えば、隣の県の栃木県で、足尾鉍毒事件というのがありました。田中正造先生が頑張ってこられたお話は、皆さん教科書でもご存じだと思いますが、その中で消えた村があるわけです、谷中村という。その谷中村というのも、消えたんだけど、北海道に新天地を求めて行ったグループもあるし、栃木県内で谷中という地域は、いっぱい存在するんですが、これは谷中村の人たちが点在したというような事例を基にして、今後の再建とか復興とかを考えていかなければならない。その前に話をするのが、放射能の話ではないのかと。放射能の話を考えてやった上で、そこでどうなのかと。20 ミリシーベルトを国が大丈夫だと言っても、20 ミリシーベルトの根拠もないし、お年寄りの場合はどうなのか、自分たちは帰りたい、そこで死にたいという方々はいらっしゃるけれども、では小さなお子さまを持つお父さんやお母さんたちに対して、それは本当に自分たちの子どもにリスクが出てこないのかというのを考えた上での話で、そこが焦点になってくると思うんですけれども、もう答えは見えてるんです。だから、そこをまずクリアにして、それに対してやった上で、では次にどうするか。それは先生の方の再建の問題で、僕らの方の出る幕はもうほとんどないんです。だから、その前のやることというのは、もう見えていると僕は思っています。だから、その部分をクリアにして、町民に理解していただく。これしかないと思うんです。だから、結局は将来この双葉町というのが、続くも続かないも、未来のあるお子さんたちに通じますから、お子さんたちに対して、きちんと説明ができるような形にしないといけないと。そこが問題ではないかと思います。

【岩本久人委員】

部会のテーマも、今の木村先生の話で、除染の話は木村先生とかいうように、だんだんとテーマが絞られてくるんじゃないかと思うんです。このまちづくり委員会も、失礼ですけども、委員長のまちづくり委員会でもないですし、善養寺さんだけのまちづくり委員会でもないと思うんです。みんなが意見を、こうやりたいとか、こう進めるべきだとかで一致すれば、路線変更してもらって、7000 人会議の中でも会議の仕方というのも自ずと変わってくると思うんです。やっぱりテーマを絞って、7000 人の復興会議、あとはインターネットでもテーマを絞っていろいろ町民の皆さんから意見を出してもらって、それをきちんとした部会で反映できるように。最終的にまちづくり委員会で、短期・中長期的なビジョンを決めていくわけですから、そういう姿に路線変更するのも、委員長、やむを得ないんじゃないかと思うんですが。

【三井所清典委員長】

今日は、本当に貴重なご意見をいただいていると思います。どういうふうな意見の聴取の仕方をするかと。今日の話では、肝心の焦点に意見は絞られて出てくると。そういう絞られて出てくるようなテーマをはっきりさせて、それで意見を求めながら、他の意見も制限することなしに聞くというような方法をとっていけば、すっかり変わるということではないと思いますので、今の提案のように検討させていただきたいと思います。

【齊藤宗一委員】

端的にお話申し上げます。私自身、双葉町に住んで先祖代々 500 年からの歴史の中で高校誘致等、地元の方は頑張ってくれたようです。そういう中で一気に決まらないという皆さんの話を聞いて私自身もそう思います。そんな中で双葉町はやっぱり、まるっきりなくしたくはないわけです。最後には子どもを守り、30 年後なり、50 年後なりに、孫たちに夢を期したいという気持ちがあります。ただ、私たちの明日には、補償がない限り明日はないです、正直なところ。中間貯蔵なんかの話も出てきていますけれども、やっぱり、先ほどの鈴木副委員長さんがおっしゃったように長たる者の考え、率先した政治です。私も町長と同じ地域です。副町長も同じ地域です。あまり申し上げにくいんですが、やっぱり、きちっとした長としての判断です。大体、この加須に来ていること自体が間違っていると思うんです、私は。大移動したときはよろしかったんですが。やっぱり長たる者、元に戻らないと自分で風評被害を出すという考えもございますので、そこら辺も考えてもらいたいと思います。まずは、1 年半以上も経って補償がない限りには、私たちには明日はない、そう自覚しております。私、今いわきにおりますけれども約 470 名おります。どちらかといえば若い人が少なくて年金暮らしで、皆さんのほとんどは、自分たちのところへ戻りたいという話ですけども、戻っても何もできないというのが現状なんです。なかなか本当のことを毎日お会いしても、話に聞くのは辛いんですが、現状は現状なんだということを、町長の口から直接皆さんの耳に入れていただきたいと思います。

【高野泉委員】

この会議は、復興まちづくり委員会ということで、100 年経っても、100 年後の復興に向けてまちづくりをするのか。それとも、待ちきれないという人がほとんどだと思うんです、正直な話。双葉町という地域を守るのか。あるいは、双葉町民の命を守るのか。どちらを選択してい

くのか自治体の考え方で変わってくると思うんです。ですから、このタイトルでいけば、復興まちづくり委員会ですから、何年経っても、双葉町に戻る計画を作る。私が住んでいた所は、双葉町で1番線量が高い土地なんです。1時間で60からお墓の高いところで100マイクロシーベルトになるんです。すごく高い土地なんです。私はすぐ帰れない。だけれども浜の方は低いんです。一時的に、そこに家を作るのか。あるいは別なところに仮のまちを作るのか。双葉町民が、いわき市とか郡山市とか、どこで住んでもいいけど、その人たちを最後まで守っていくことが一番大事である。この復興まちづくり委員会のタイトルの頭をどうしたらいいのかというのが見えないから、吉田委員や中村委員が話した、そういうことがどんどん出てくると思うんです。これは10年後、20年後の計画を作る委員会なのか。はっきりしてもらわないと、みんな意見がバラバラ出てきてしまうんではいかと私は思います。ですから、やはり復興を100年後に作っても絵に描いた餅になってしまうし、それを実現するかと言ってもできない。町民は早く設定してほしいのが現実です。どこかにいわきに行くか郡山に行くかどこかに行くか、違う所に町をつくるのか。これでいくと、双葉町を今のところにつくって、何年間後に作りましょうという形にしてしまうと、意見がまた違ってくる。私は福島県が可愛いですし、双葉町も可愛いです。ずっと住んでいたいですし、帰りたい。みんなそうだと思うんです。帰りたいんです。帰れないとはっきり決定してほしいと意見が出ましたね、町長にも早く決定してほしいと。それを決めないと、この復興まちづくりをどうしていくか、意見を述べようと思っても、述べようがないというのが現実だと私は思うんです。

【宇杉和夫委員】

先程と繰り返しになってしまうんですけど、私は体験していませんので言えないんですが、今皆さんは双葉町に帰れない、他の町に行くと。その時にどういう有利な新しい生活ができるような条件をここで決めるのがこの委員会の主な目的なのか、ということですね、今おっしゃっていることは。そういう委員会と、例えば仮住まいがずっと続くわけです。100年続くかもしれない。100年ではなくても、どこまで行ったら本当に双葉町にこれまで住んできた人とこれから子どもたちとの繋がりができるような、そういうようなことを考えることを大切にしようとして欲しい。そこが少し、私が気になる場所なんです。その2つがテーマにあるとすると、まず、後者の方を少しでも議論してから、私たちが出来る条件の中で有利に次の世代への繋がりをつくることができないか、単純に次に進んでしまわないで、どうやって次世代と地域郷土との関係を結びつけるか。進む前に1回そういうのをやってからの方が、私は後の人たちに子どもたちに説明がつくのではないかと思います。

【鈴木浩副委員長】

宇杉さんね、今の話は、たぶんこういうことなんです。たぶん、双葉町にはすぐには帰れないかもしれないけれど、今皆さんの中に双葉町としてのアイデンティティだとか絆はあるんです。だから、他の所に避難しているとしても、双葉町の地域社会のみんなの結びつきは、散り散りバラバラになっていても、それはどっかで繋げましょうというのを、これからもやっていかないといけないんです。しかし、今、皆さん方が避難しているところで、あるいは、次の拠点ができたとして、そこではそこでまた他の人たちと一緒にコミュニティをどうしたって作らないといけない。子どもたちはそこに同化していかないといけない。あるいは、生業をやろうとし

たら、そのところで双葉町の生業を集積できるわけではないので、要するに、悔しいけれども、双葉町の方々は双葉町の絆を確保するためのコミュニティ論と、新しいところでのコミュニティ論を2つの戦略を作らないといけないんです。どちらかに選択するという話ではないんです。

【菅野博紀委員】

もう少し考えてという時間は過ぎているんです。1年半って、すごく長くて、万が一他の地域であった時に、この1年半をのんびりできるんだとそういうふうな目で見られても困るし、だから委員長に言っているのは、避難のこととかをどういうふうに思っているのかと。この1年半、全然違う。僕もここに住んでいました。それで役場もこちらに来ました。ホテル住まいもしました。自宅にも行きました。いろんな方の意見を聞いています。特に、若い人たちの話を聞いていますけれども、その気持ちが、例えば後世の為にきちんとやるべきだということであれば、後世の為にやるんだったら時間をかけさせないでやらないと、この1年半で何人犠牲になりましたか。津波被害で生きていたかもしれない人を、助けに行けなかった。朝、僕たちは行こうとしていて、行けなかった。ここの体育館で亡くなった人もいらっしゃるんです。それに自分の家を持っていて、体育館の床の上で亡くなられた人とか、帰りたいと言っていた人がベッドで亡くなった人とか色々いるんです。そういうことを総合的に判断した時に、分かりますか、言っていること。だから、さっき言ったのは、町の人間が入ってないではないかと、意見を前は聞いてもらえなかったし、何か変な人にブログ書かれて、実際泉田君とかそういう子の意見に対して僕は応援はします。応援をするということは、それが本当の意見なんです。双葉町の地域コミュニティだけではなくて、その周りの双葉郡としての、隣町の親戚関係とかということも、コミュニティを分らない人には何とでも言えます。だけど、それがあって地域コミュニティだということを、僕は理解していただきたいんです。鈴木先生が言ったように、僕らの地域は地域でやっぱり特殊性はあると思うんです。温暖で食べ物がおいしくて、山菜とか、パックで売っていてびっくりしました。そういうことが全然、生活が全然違うので、その認識を分かってもらわないと、あの苦しさとかが分かって、もう少し提起をきちんとまとめてもらえないんだったら、話にならないです。来ている意味がなくなっていった、だんだん委員の人が来なくなってきたら、どうにもならなくなって来るので、きちんとした意見を聞いてもらって、その問題集約をきちんとまとめるように方向性もっていったらもらわないと、この1回目、2回目の会議の意味がなくなってくるのではないんですか、実際。

【三井所清典委員長】

きちんと意見を出して欲しいということをおっしゃっているわけですね。それで、何人かの意見だけでまとまるということではなくて、できるだけ多くの方の意見を聞きながらっていうことをやっていますから、並行してやりましょう。今日は、時間になったんですけれども、貴重な意見をたくさんいただいてありがとうございました。是非、今日の話も言い足りないところもたくさんあると思いますので、ぜひ次の会までご意見出していただきたいと思います。何回出されても結構ですので、ぜひよろしくお願いします。その他ございますか。今日貴重なご意見たくさんいただきましたので、急ぐ、焦点を絞ってという話、部会の持ち方についての話よく分かりましたので、検討してください。両副委員長と相談しながら進めてください。どうもありがとうございました。

### 3. その他

#### 【伊澤慶昭委員】

復興会議の方の日程は入っているんですけど、委員会の方の日程を2週間前に文書で来られても、会社休みづらいので、できればスケジュールある程度埋められるのであれば、できるだけ入れてもらって、事前に分かっているなら会社にも出せるので、できるだけ出席したいので、会社にもこういうのがありますというのを出せるようなものいただきたいなと思います。

#### 【菅野博紀委員】

事務局は普通若い人入れるんだったら、休んでくる人を考えないと、自分たちも休みではないんだから。

#### 【事務局】

そこは早めに整理してお知らせするようにします。

### 4. 閉 会

#### 【三井所清典委員長】

貴重なご意見ありがとうございました。本日はありがとうございました。

以上